

## 「日本音楽学会国際研究発表奨励金」受領報告書

佐々木 優（西日本支部）

### 1. 発表学会について

学会名：第十九回国際美学会（The 19th International Congress of Aesthetics）

開催期日：2013年7月21-27日開催

開催地：ヤギェウォ大学（クラクフ、ポーランド）

標記の学会は、三年に一度行われる国際学会で、美学関係の学会では最大のものの一つである。広い意味での美学研究者が世界中から集まり、今年も500人にもなるかという研究者が発表を行い、一週間にわたる会議は盛況のうちに終了した。

国際美学会ではその大会ごとに大テーマというものが設定される。今年の大テーマは”aesthetics in action”であった。さらにこの下に小テーマがあり、そのテーマごとにセッションが分かれる。各セッションには三人の発表者が割り振られ、発表20分、質疑応答10分という持ち時間で発表と議論を行うという形式になっている。私は三年前に北京で行われた同会議にも参加したが、発表の形式は全く同じものであった。

発表は、英語・ドイツ語・フランス語という規程であったが、私が聞いた限りでは、全員が英語による発表であった。

### 2. 研究発表要旨

セッション名：Body Aesthetics

日時：2013年7月26日

発表タイトル：Two Mediators for Musical Improvisation – Sign and Instrument

#### 【要旨】

発表者の関心は、即興演奏とは何かということ、音楽美学的立場から答えることにあ  
る。本発表は、そのための予備考察として、即興演奏における媒介の問題を論じる。

即興演奏についての従来理論は、即興演奏を、(1) 身体レベルでのハプニングとして  
捉えるか、(2) 観念を実在へ計画通りに外在化するものと捉えるか、のどちらかであ  
った。しかし、我々はどちらにも与しない。まず(1)の立場に対して。確かに、身体は、即興  
演奏の本質的な一部である。しかし、同時に、身体は、即興演奏の本質的な一部でしかな  
い。したがって、身体性だけを考察するのでは、包括的な即興演奏論を構築すること  
はできないと我々は考える。次に(2)に対して。例えば(2)の立場の代表的な論者レイ  
モンは、「構想と実行のあいだの猶予は、この行為の無媒介性 (l'immédiateté) によ  
って消去される」という。(2)の立場の論者は、二元性の解消のために、「瞬間性」や「無媒介性」

を強調する。即興演奏においては、構想から実行への移行は、彼の言うように「瞬時のうちに (dans l'instant)」行われうる。しかしながら、そのことが直ちに、即興演奏と言う行為の無媒介性 (l'immédiateté) を意味するわけではない。さらにいうと、構想と実行は媒介なしで結びつくことはありえない。「二者の間の遅れは、この行為の無媒介性によって消去される」のではなく、むしろ両者の結びつきは媒介によってこそ可能になるのだ。となれば、即興演奏の存在論は、「瞬時のうちに凝縮する行為」故に癒着し見えにくくなっている「構想と実行のあいだ」にメスを入れ、そこに「展開されているもの」をこそ明らかにしなければならないだろう。

以上をまとめる。我々は、身体性だけを強調する即興演奏論には与しない。我々は、還元主義的ではなく、多元主義的な即興演奏論を標榜する。また、我々は、無媒介性を強調する即興演奏論にも与しない。我々は、直接性ではなく媒介性を強調する立場をとる。このような立場から、まず次のような作業仮説をはじめに立てた。「**作業仮説 1** : 即興演奏とは、その場で思いついた音のイメージを、楽器を使って、物質的な音へ変換することである」。

この仮説にのっとり、続き具体的に変換を媒介するもの——つまり楽器と記号——について考察した。

まず我々は楽器を、「操作部」と「発振部」とからなるものと考えた。操作部では、奏者による楽器の操作が行われる。(この操作を、「器楽操作」と呼ぶことにする)。発振部では、振動体の発振が生じる。我々は、楽器を、操作部における器楽操作を、発振部における発振へと変換するシステムであると規定し、これを「器楽システム」と呼んだ。器楽システムは、器楽操作から物質的な音への変換を媒介するものである。

次に、音のイメージから器楽操作への変換を媒介する「記号」についての考察に移った。奏者が器楽システムを働かせること、つまり楽器を練習することを通じて、音のイメージと器楽操作のイメージから成る記号システムが獲得される。この能力が獲得されれば、ある音のイメージは特定の器楽操作を奏者に想起させるので、奏者はその音を出すための器楽操作を実行することができ、その器楽操作の結果、物質的な音が生じる。

このように器楽システムと記号システムが媒介として存在することで、奏者は、音のイメージを物質的な音へと変換することができる。つまり、即興演奏ができるようになる。以上の考察から、我々は作業仮説 1 を修正し、次のような結論を導いた。「即興演奏とは、その場で思いついた音のイメージを、記号システムを媒介として、器楽操作に変換し、その器楽操作を、楽器システムを媒介として、物質的な音へと変換することである」。

### 3. 質疑、反響と感想

本発表は、発表者の博士論文「多重化された行為としての即興演奏—オーネット・コーマンの音楽をモデルに—」から一部を抜粋して、簡潔にまとめたものである。発表内容は博士論文の議論を進めていくうえでの枠組み設定の部分に当たるので、どうしても抽象的な内容となることは避けられなかった。そこでパワーポイント作りにいつも以上に力を

入れ、視覚的に理解できるよう工夫をした。その結果、私のつたない英語による発表でも内容を理解してもらうことができ、きちんと中身を踏まえたうえでの質問を頂戴することができた。

まず、「音のイメージを物質的な音へ変換することが即興演奏だとするならば、楽譜のある場合の演奏と即興演奏ではどこが違うのか」という質問を受けた。これと同様の質問は、予行演習等で何度か聞かれたものであったので、次のように答えた。読譜演奏と即興演奏は、対概念であるかのように語られるが、私はそう考えない。読譜演奏は、即興演奏の下位概念である、と私は考えている。つまり、読譜演奏は、即興演奏の一形態、即興演奏のスタイルのひとつである。

また、「機械は即興演奏するか」といういささかユニークな質問も受けた。私は、機械は想像できないので、即興演奏はできないと考える、と答えた。私は、即興演奏と対立する比較対象として、読譜演奏ではなく、自動演奏（特に前衛音楽によるコンピューター・ミュージック）と、ジョン・ケージらによる反演奏の試み（プリペアド・ピアノなど）を考えていたので、この質問は興味深く聞いた。この点は博士論文でも扱っていない点なので、今後の課題として考えていきたい。

以上のように質問は貴重な示唆に富むものであったが、惜しむらくは、学会の最終日のしかも朝の8時からの発表であったため、聴講者が少なかった点である。私以外の発表者も充実したプレゼンテーションをしていただけない、その点は残念に思った。もう少しスケジュールに余裕をもたせることはできないものかと思うが、このような大規模な学会では仕方がないことなのかもしれない。

ヤギェウォ大学はのあるクラコウの旧市街は美しく、食事も（意外なことに？）大変美味しかった。エクスカーションでアウシュヴィッツを訪れたのも貴重な経験になった。三年前に北京へ行った時も思ったが、国際学会は自らの研究の視野を広げるだけでなく親善や観光も含めて本当に良い経験になる。このような貴重な機会を与えてくださった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に感謝を申し上げたい。